

教えて!

vol.70

市立病院

テーマ

予防接種で防げる
赤ちゃんの病気

今月のドクター

小児科医長
篠崎敏行 医師



小児がかかる感染症には、軽症で済むものから重篤な疾患を引き起こすものまで様々あります。近年は、重篤な感染症に対して予防接種が開発され、病気を予防できるものが増えてきました。ワクチンの種類が増えたことで、受診回数や注射回数が増加し、赤ちゃんの負担になったり、スケジュールが複雑になったりするという課題もありますが、予防できる病気を予防して子どもが健康に育っていけるよう努力することが、養育者と社会にとっての責務です。今回は、赤ちゃんが生まれてから2か月の時に接種するヒブ・肺炎球菌ワクチンについて説明します。

ヒブとは「インフルエンザ菌 b 型」の略称です。冬に流行するインフルエンザの原因となる「インフルエンザウイルス」とは全く別の病原体です。インフルエンザ菌は、髄膜炎・ずいまくえん 喉頭蓋炎・こうとうがいえん 肺炎などの重症感染症の原因となる菌です。髄膜炎では、脳・脊髄を包む「髄膜」に細菌が感染し炎症が生じることで、発熱・けいれん・意識障害などの症状を発症し

ます。抗生剤で治療しますが、治療の甲斐なく亡くなることも時にあります。後遺症として発達・知能の障害や難聴、麻痺が残ったり、てんかんを発症したりすることもあります。

肺炎球菌も同様に、特に2歳以下の小児では、肺炎のみならず髄膜炎や菌血症などの重篤な感染症の原因となります。ヒブ・肺炎球菌による髄膜炎が起こりやすくなる生後2か月（母親からの移行免疫が低下してくるため）から予防接種を開始して、生後6か月までに初回3回の接種を済ませましょう。1歳を過ぎた頃には、追加の予防接種も忘れずに。

その他、ロタウイルス、B型肝炎、百日咳、はしか、水痘など、小児にとって重要な予防接種を必要な時期に接種するよう、かかりつけ医と相談していきましょう。

■問合せ／市立病院総務課企画財務担当 ☎ 22-2450